

口絵解説

俳諧 虎溪の橋

井原西鶴編 京 井筒屋庄兵衛板  
横本 一冊 特別資料〔ハ五・六七五〕

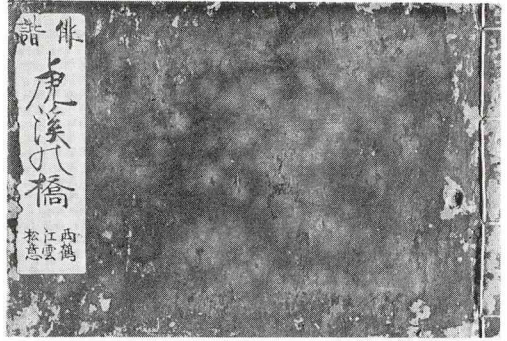
本書は、京都の俳人那波江雲（葎荷）の庵に、江戸の田代松意と大坂の西鶴が相会し、江雲を交えて興行した三吟百韻三巻を収録したものである。巻末に、この興行の翌日嵯峨野に遊んだ西鶴と河野定俊による両吟歌仙一巻を添えている。刊年の記載は欠くが、阿誰軒『俳諧書籍目録』に『大硯』『幕づくし』（延宝六年四月刊）と併出している事から、延宝六年の刊行と推定される。序・跋ともなく、本文中にも西鶴が編者であることを示す文字はないが、定俊との歌仙が付載されていること等から、本書の編纂刊行が主として西鶴の力によるものであることは間違いない。書名は言うまでもなく、「虎溪三笑」の故事にちなんだもの。集中、江雲の発句に「酔の色や三人の笑ひ草」とある。

本書の成った延宝六年頃、俳壇の中心勢力は、貞門にとってかわった談林の人々であった。漸新な趣向を軽妙な口語で自在に詠んだ談林流は、延宝三、

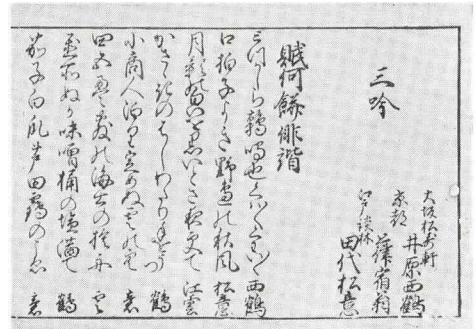
四年頃、大坂を中心に全盛を迎えたが、延宝末年には早くもマンネリズムに陥り、やがて蕉風の台頭とともに急速に衰退の道を迎えることになる。一方、編者西鶴は、寛文十三年『生玉万句』の成功によって一躍大坂俳壇の立役者となった後、延宝五年『西鶴俳諧大句数』で矢数俳諧流行の先鞭をつけ、同八年には独吟四千句『西鶴大矢数』を興行して余人の追隨を許さぬ大記録を樹立、宗因門下の第一人者たる事を天下に示すが、天和二年には初の小説『好色一代男』を発表、以後小説に創作の主力を注ぎ始める。つまり、本書は、談林俳諧および俳諧師西鶴の最も得意の時期に編まれた撰集であり、談林の動向や西鶴の俳諧を考える上で、逸することのできない貴重な資料といえることができる。

本書の伝本は少なく、わずかに天理図書館本（題簽を欠くもの）と、東大西竹文庫本（題簽のあるもの）の二本が知られているにすぎない。館蔵本は題簽完備のうえ極めて保存状態が良く、昭和六十二年春に出現の際は、斯界に話題を呼んだ。

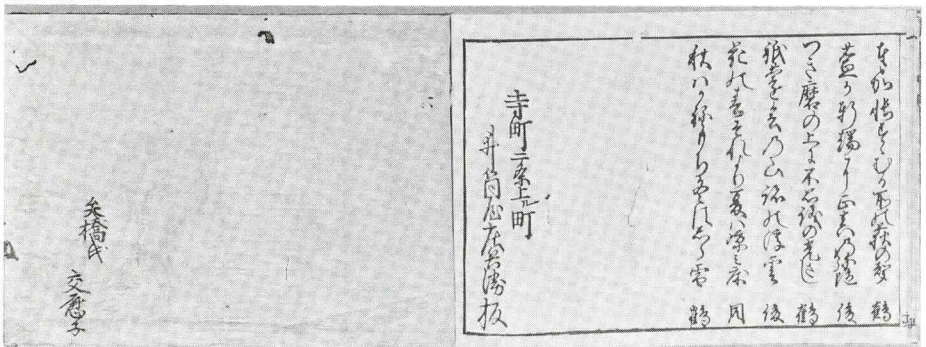
後表紙見返しに「矢橋氏交慰子」と墨書があり、元禄四年に没した美濃赤坂の矢橋家第四代交慰（季吟門）の旧蔵本である。



表紙



巻頭



巻末・後表紙見返し